Catalog 19-#1

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ３/５までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（平成最後の年の最初のカタログ）
*予報通り、本当に暖冬になりましたね。積雪が一回のみというのは、湯布院に来てから初めてです。過ごしやすいのは助かりますが、何か春の有り難みが減りそうな気分です。
*年が明けて、ちょこちょこ仕入れている内に、結構良いものが揃いました。今回も女性シンガーのＣＤがかなり充実しています。だめ押しで？ラトヴィアの美人六人組 Tautumeitas というのまであります。
*前回は Hannah Rarity と Colleen Raney の予想以上の注文の多さに慌てました。Hannah はほとんど自宅にいなくて、連絡が取れても、遠出中で発送ができなかったりで、遅れに遅れたことが幸いしてご注文された皆さま全員にに送ることができました。Colleen に追加で発注したら「今アイルランドのディングルにいるの。こっちから送るね」と。今年もスリリングな仕入れ＆発送になりそうです。いつも気長に待って下さる皆さまに感謝感謝です。
*昨年末のカタログのあとがきでお知らせした堀田はりいの新しい本『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』（右文書院）の発売日は予定より早くなって、三月中旬（奥付は 3 月 15 日）のようです。校正はすべて完了して、あとは発売日を待つのみです。最後のページで宣伝しています。今回も音楽の本ではなくて申し訳ありません。
*前回販売した Hidden Agenda Deluxe & Oh Susanna のクリスマス･アルバムのコメントで Hidden Agenda Deluxe をドイツのバンドと書きましたが、オランダのバンドでした。訂正しお詫び誤します。ます。それはともかく彼らは米国のバンドが模範にして欲しいくらい良いバンドですよね。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は４月 15 日まででＯＫです。

＊TOP 30 SELLERS(18－#6)＊
1)HANNAH RARITY:Neath The Gloaming Star(Scotland)
2)KARAN CASEY:Hieroglyphs That Tell The Tale(Ireland)
3)EMMA MARSHALL:The Building Light(England)
4)COLLEEN RANEY:Standing In Doorways(USA)
5)FURROW COLLECTIVE:Fathoms(England,Scotland)
6)PAIVI HIRVONEN:Alku - The Beginning(Finland)
7)THE OUTSIDE TRACK:Rise Up(Ireland,Scotland,Canada)
8)ALELA DIANE:The Pirate's Gospel～Deluxe Edition(USA)
9)ALEC FINN:Blue Shamrock(Ireland)
10)MATT MOLLOY:Back To The Island(Ireland)
11)HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA
:Angels In The Snow(Holland,Canada)
12)J.P. HARRIS:Sometimes Dogs Bark At Nothing(USA)
13)LINDA THOMPSON PRESENTS
:My Mother Doesn't Know I'm On The Stage(England)
14)LUKA BLOOM:Sometimes I Fly…(Ireland)
15)LISA LESTANDER:Sanger Fran Norr II(Norway)
16)AD VANDERVEEN:I Was Hank Williams(Germany)
17)JAMIE MacDONALD & CHRISTIAN GAMAUF:The Pipe Slang
(Scotland)
18)KENDAL CARSON:The Lost Tapes Of Suzanna Hamilton
& The Calgary Sessions(USA)
19)GERRY O'CONNOR:Last Nights Joy(Ireland)
20)TOMMY PEOPLES
:Traditional Irish Music On The Fiddle(Ireland)
21)BOTTLE ROCKETS:Bit Logic(USA)
22)THE BROTHER BROTHERS:Some People I Know(USA)
23)MISCHIEF AFOOT:Mischief Afoot(England)
24)SUGARCANE JANE:Suthernstate Of Mind(USA)
25)MARTIN & ELIZA CARTHY
:Live At The Pavilion(England)
26)BOB AND GILL BERRY:Echoes Of Alfredy(England)
27)TRAIL WEST:From The Sea To The City(Scotland)
28)CUIG:The Theory Of Chaos(Ireland)
29)TANXEDORAS:1952. Homenaxe A Alan Lomax(Galicia)
30)DAITHI GORMLEY:Fiddling Without A Bow(Ireland)

Re-issue, USA, Canada, British Folk, England, Scotland,Ireland,

USA(Trad), Europe ほか, あとがき, 古代天皇誕生記

（ジャケ写掲載分が初入荷商品です）

[リイシュー/Historic Recording]

（LP/Ｕ．Ｓ．Ａ.）

*SHIRLEY COLLINS:The Ballad Of Shirley Collins　¥3290
（限定カラー{桃色}LP 盤。Shirley Collins のドキュメンタリー映画から音楽を寄せ集めた 21 トラック収録の編集盤。2018 作。Earth）

（CD/Ｕ．Ｓ．Ａ.）



（Linda Ronstadt）

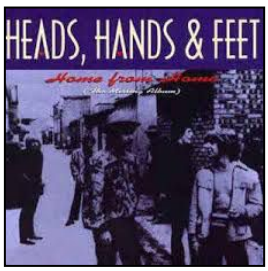
*LINDA RONSTADT:Live In Hollywood　B
（1980 年のコンサート･ライヴとスタジオ･ライヴ音源から選曲で、"It's so Easy"や"Willin'"や"Desperado"など全 12 曲。プロデューサは John Boylan で、Kenny Edwards, Danny Kortchmar, Russ Kunkel, Bob Glaub, Billy Payne, Dan Dugmore, Wendy Waldman, Peter Asher などがバックアップという美味しすぎる西海岸ロックと選曲。Linda のヴォーカルもパンチが利いて冴えに冴えている。1980 年/2019 作。Rhino）

（LP/ＢＲＩＴＩＳＨ　ＦＯＬＫ）

*BERT JANSCH:Moonshine　¥2690
（名盤中の名盤。LP 盤。1973 年作。1973 年/2015 作。Earth）

*BERT JANSCH:L.A. Turnaround　¥2890
（名盤中の名盤。1000 枚限定カラー{青}LP 盤。アルバム未収録曲４曲を追加収録したダウンロード･コード付。1974 年作。1974 年/2018 作。Earth）

（CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他）



（Heads, Hands＆Feet）

*HEADS, HANDS & FEET:Home From Home　A
（副題"The Missing Album"の Heads, Hands&Feet{Tony Colton, Albert Lee, Pat Donaldson, B.J.Cole, Jerry Donahue, Ray Smith 他}の実質的デビュー･アルバム。録音は 1968 年の 10 月～12 月。聴くのも販売するのも初めて。いやはや時代のロックというか、音楽は真っ直ぐに米国西海岸ロックを志向したロックで、音楽の若々しさと懐かしい音についニンマリしてしまう。ロックは西海岸ロック志向だが、体現されたロックはほのかに英国的優美さが香

っている。本作が皆さんのスタートラインですね。ライナーでは「Heads,Hands&Feet のベスト･アルバムと信じる」と。皆さん、メチャ青春してますね。1968 年/2009 作。Pukka)

*DAVE WAITE & MARIANNE SEGAL:Paper Flowers A

(英国のフォーク･ロック･バンドの Jade の Dave Waite と Marianne Segal が Jade 結成以前にデュオで活動していた時代の 1967～1970 年の未発表音源から 22 曲を収録した編集盤。70 年代前後の米国のピュアな女性フォーク･シンガーの趣があって、その若草の香りの Marianne のヴォーカルと Marianne & Dave のヴォーカル･デュエットが新鮮。この時代、英国の若いフォーク･シンガーもミュージシャンも、米国音楽への憧れて音楽活動をしてましたよね。その真っ直ぐさと、ほのかに香る英国風香りが気持ち良い。2004 作。Lighting Tree)

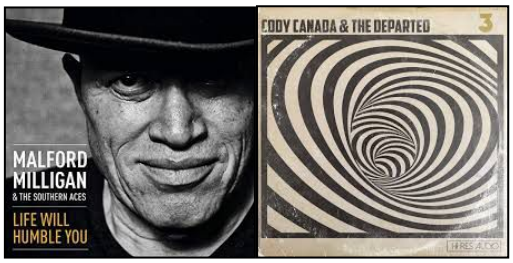
*BERT JANSCH:A Man I'd Rather Be (Part 1) ¥4980

(ハードカバーブック型四枚組ボックスセット。ディスク１は 1965 年の"Bert Jansch",ディスク２は 1965 年の"It Don't Bother Me",ディスク３は 1966 年の"Jack Orion",ディスク４は 1966 年の"Bert and John"。ブックレットは Bill Leader による新たな解説や未使用ジャケット候補など未公開写真など興味深い内容になっている。保存版。2018 作。Earth)

*BERT JANSCH:A Man I'd Rather Be (Part 2) ¥4980

(ハードカバーブック型四枚組ボックスセット。ディスク１は 1967 年の"Nicola"",ディスク２は 1969 年の"Birthday Blues",ディスク３は 1971 年の"Rosemary Lane",ディスク４は 1973 年の"Moonshine"。ブックレットは英 MOJO Magazine 誌のライター Dave Henderson による新たな解説や未使用ジャケット候補など未公開写真など。保存版。2018 作。Earth)

[CD/ＵＳＡ]



(Malford Milligan) (Cody Canada&Departed)

*MALFORD MILLIGAN & SOUTHERN ACES
:Life Will Humble You A

(1959 年テキサス生まれの南部ロック&ソウル系 SSW の Malford Milligan の新作は、泣けるほどに旨みのある南部フィーリングなルーツ志向でソウルフルでグルーヴィーな SSW アルバム。バックを務めるのはオランダのロックバンドの Southern Aces～メムバーはプロデューサーの Jack Hustinx{ﾄﾞﾗﾑｽ},Roel Spanjers{ﾋﾟｱﾉ､ﾊﾓﾝﾄﾞｵﾙｶﾞﾝ､ｱｺ},Eric van Dijsseldonk{ｴﾚｷｷﾞﾀｰ},Roelof Klijn{ﾍﾞｰｽ}～。オランダのバンドとは馬鹿にはできない。同じオランダの Hidden Agenda Deluxe のロックにも舌鼓を打ったが、Southern Aces のロックも 70 年代 The Band 系米国ロックの旨みをビシッと保持していて、舌鼓を打つ。Malford のヴォーカルは Brinsley Schwarz をバックに従えていた時代の Frankie Miller

っぽい。バックの音も結構 Brinsley っぽい。全 13 曲たっぷり充実。2018 作。Royal Family)

*CODY CANADA & THE DEPARTED:3 A

(本作でのバンドの編成は Cody Canada{ヴォーカル、エレキ&アコースティック・ギター他}と Jeremy Plato{ヴォーカル、ベース他}と Eric Hansenheavy{ドラムス}の三人組{元は五人組}ルーツロック・バンドの四枚目でアルバム・タイトルは３。リーダーの Cody Canada の資質はテキサスのレッドネック・シンガーのタイプで、テキサス・スタイルのフォークやルーツロックをベースに南部ロックや西海岸ロックにまで色気を出して、バンドのフォーク～ロックを彩る。どのタイプのナムバーもつぼを得た、かつ聴き親しんだフォークやロックで、ハマッてしまう。Cody の味のある土臭いヴォーカルも良いが彼のゴリゴリのエレキギターは凝った肩をほぐしてくれるような感じで病みつき。ヴェテランの風格だが、フットワークは軽い。2018 作。Blue Rose)

*J.P. HARRIS:Sometimes Dogs Bark At Nothing A

(アラバマ出身の SSW の本作は「これ、70 年代の SSW アルバムじゃないの？」と耳を疑ってしまう 70 年代のレッドネック・ロックの SSW 風のヴォーカルとビシッとバッチリなやや南部風カントリー・ロックで、嘘みたいに出来過ぎ。J.P. の唄は若かりし頃の Steve Goodman や Jerry Jeff Walker や Guy Clark などの唄を思い起こさせ、エレキ＆ア コースティック・ギター、スティール＆スライドギター、ドラム ス、フィドル、ピアノなどによるバンド・サウンドも、あの時代の音を体現していて、あの時代の SSW の名盤が今に蘇ったかのような SSW ファン歓喜のアルバム。2018 作。Free Dirt←このレーベルははずれがない)

*RYAN MONTBLEAU:Woodstock Sessions A

(マサチューセッツ出身の SSW の R.Nontbleau のウッドストックにある"Applehead"スタジオでのギター弾き語りライヴ。2002 年にデビュー・アルバムを発表していて、本作は 13 作目らしい。初めて聴く彼の唄はひたすら純粋で誠実。ファンを前にして行ったギターの弾き語り{＋チェロが入る曲数曲}ライヴが功を奏してか、ギターの美しい音色を伴った味のある節回しの唄は、どの唄もぬくもり感があって、じわりじわりと心に響く。アルバム・タイトルに惹かれて仕入れて聴いたら、予想した音楽とは真逆な？心洗われるような SSW アルバムらしい SSW アルバムに出遭えて、心和み＆心笑顔。昔の Bill Morrissey クラス。2018 作。Woodstock Sessions)

*AD VANDERVEEN:I Was Hank Williams A

(便宜上ここで。かつて Iain Matthews、Eliza Gilkyson とトリオで"More Than A Song"を発表したことのあるカナダ系ドイツ人 SSW の Ad Vanderveen の新作は、フォーク・シンガー/SSW としての原点に帰るうたうことに真っ直ぐなアルバム。ギターの弾き語りのみならず、適度にロック的な音作りがなされたナムバーやホーンや女性ハーモニー・ヴォーカルが入るナムバーもあるが、正にいぶし銀の唄の味わいは、SSW アルバムとして円熟度を極めていて、アルバムを通して渋く感動的。酸いも甘いも知った古老シンガーが、これまでの人生を振り返りながら、リラックスし、じっくりとうたった感じだ。名盤誕生。Blue Rose)

*THE BROTHER BROTHERS:Some People I Know A

(双子の兄弟の Adam & David Moss のデュオ。しばらくこんな感じ～Everly Brothers や Aztec Two-Step のようなほんわかな男性デュオ～の男性二人組のアルバムはなかったような。ジャケットの「飲んだくれ兄弟」のイメージとは真逆の美しいハーモニーとソロによる夢見る純情青春ソングのような初々しい唄が並ぶ。David が爪弾くアコースティック・ギターはピッキングが鮮やかで初々しく、Adam が奏でるフィドルは愁いがある。おやじデュオながら胸キュン。2018 作。Compass)

*SUGARCANE JANE:Suthernstate Of Mind A

(Sugarcane はアラバマの Anthony & Savana Lee Crawford の夫婦デュオ。ご主人の Anthony は Neil Young や Steve Winwood や Vince Gill などと活動していて、その後 Savana と出逢ってからデュオで活動を始めたという。"Grievous Angel"時代の Gram Parsons & Emmylou Harris 風デュエットで幕を開ける本作は、ホームメイドな 70 年代の西海岸カントリー・ロック風美味サウンドと共にぞっこん。Anthony の声自体に Roger McGuinn や Gram Parsons のような人を惹き付ける魅力があって、ギターの弾き語り調もカントリー・ロック調も、どの唄も懐かしいような後ろ髪引かれる。2018 作。Arena)

*MOHEAD:Son Of The South A

(メンフィス生まれの南部ロッカー&SSW&ギタリストによる、"Son Of The South"というアルバム・タイトルに偽りなしの嘘みたいに南部ロックな SSW アルバム。自身が弾くエレキ&スライドギターにドラムス、ベース、オルガン、フィドル、女性バックグラウンド・ヴォーカルによる体に美味しい南部ロック・サウンド、そして本作の主役の Mohead の Van Morrison や Greg Allman をホーフツさせるヴォーカルは、南部ロックの旨みをばっちり体現。2018 作。Rogue/Continental)

*CHRIS WALL:No Sweat A

(Jerry Jeff Walker の"Tried & True Music"に所属し、オースティンを拠点に活動していたカントリー/ホンキートンク系 SSW の Chris Wall の 1991 年のアルバム。当時最高レベルの豊穣なテキサス産プログレッシヴ・カントリー・サウンドのもと、気骨ある Chris のヴォーカルによる本作は、それ系 SSW の王道を行く豪快で爽快なアルバム。在庫期間が長い CD なので検盤をしたところ、ディスクとブックレットは新品を保っていますが、ホッチキスがひどくさび付いていて、ものによってはブックレットを綴じきれない可能性があります。廃盤。1991 作。Ryko)

*THE V-ROYS:All About Town A

(ナッシュビルの四人組ルーツロック・バンド"The V-Roys"の 1998 年リリースの二枚目。Twangtrust{Steve Earle & Ray Kennedy}がプロデュースを手がけた本作は、ブルーグラス、カントリー、フォーク、ロック、パンク等を凝縮して、ビートルズ風に仕上げた風の音楽的にメチャ魅力的なアルバム。在庫期間が長い CD ですので、検盤をしてお送りします。在庫数僅か。1998 年。E-Squared)

*ARTHUR DODGE AND THE HORSEFEATHERS:Nervous Habit A

(初期 Crazy Horse や初期 Byrds の影響を受けたという Arthur Dodge と彼のバンドによる 2000 年のアルバム。Randy Newman を思い起こさせる Arthur Dodge のしたたかさを秘めたしゃがれ声と彼のバンドのやや粗めでどっしり感のあるルーツロックは、百戦

錬磨の手応えと味わいがあってメチャ最高。2000 作。Blue Rose)

*THE SHOW PONIES:How It All Goes Down A

(Show Ponies は Clayton Cheney{ヴォーカル、ベース}と Andi Carder{ヴォーカル、バンジョー}の男女のリード・ヴォーカルに Jason Harris{ヴォーカル、ギター}, Philip Glenn{フィドル}, Kevin Brown{ドラムス}を加えた一姫四太郎の、ロスを拠点に活動するルーツロック・バンド。彼らのロックは二人のヴォーカルを含めて、ルーツ色が濃く、また 70 年代のカントリー・ロックのように音楽に活気がみなぎっていて、雑草のようにたくましい。デジタルの時代に対抗するかのような彼らの健やかなルーツロックは、心身を元気にしてくれる。2017 作。Freeman)

[CD/ＵＳＡ{female}]



(Jess Klein)



(Kerri Powers)

*JESS KLEIN:Back To My Green A

(かれこれ 20 年のキャリア{デビュー作は 2000 年に Rykodisc から発売された"Draw Them Near"}のヴェテラン女性 SSW の Jess Klein の新作。彼女現役バリバリだが、本作は音楽的にも精神的にも彼女のルーツ回帰的な内容で、70 年代風ルーツロック・サウンドを伴った心を見つめる素直な唄は、真っ直ぐに心に響く。伴奏は、各種ギターの Jess 以外は Thom Canova{ベース、エレキギター、パーカッション}と Mark Simonsen{ピアノ、エレキギター、ドラムス、グロッケンスピール他}の二人のみ。この二人のロックの素朴さやストレートさが逆に功を奏していて、身体に美味しいし、Jess の初心のヴォーカルといい、初期の Linda Ronstadt のような雰囲気が感じられるものになっている。ゲスト; Jonathan Byrd{ヴォーカル}, Mike Grigoni{ペダル&ラップ・スティール}。2018 作。Blue Rose)

*KERRI POWERS:Starseeds A

(いやはやこれほどフォーク＆ブルース魂を持つ女性 SSW がいるとは驚き。10 代の頃からニューイングランドのコーヒーハウスでうたっていたという。ボトルネック・ギター、スライドギターをかき鳴らしうたう Kerri のヴォーカルの旨みと渋みと凄みと言ったら、較べる女性 SSW が思い当たらないほど、まさに Kerri スタイル。アコースティックであろうとルーツロックであろうと、Kerry の真っ直ぐに米国フォーク＆ブルースのルーツを志向する音楽は魂を揺さぶる。全 10 曲中 8 曲が自作曲で、他の二曲の内一曲は Gene Clark 作の"Polly"。個人的には Ian Matthews の"Journeys From Gospel Oak"での Ian Matthews のヴァージョンに親近感を覚えるが、Kerri はこの唄を Gene Clark 風の節回しでうたっていて、圧巻。2019 作。MH Music)

*ALELA DIANE:The Pirate's Gospel(Deluxe Edition) ¥2390

(Alela Diane の 2006 年のデビュー作に未発表音源曲 10 曲を加えて、新たに二枚組で発売されたデラックス版。Alena は音楽家の両

親のもと、カリフォルニアの深い森の家で両親からフォークソングを習ったという。本作は過去と未来や人生、死、誕生などについて思索した自作の唄を父親のスタジオで録音したもので、唄もギターの伴奏もいたって素朴ながら、唄の味わいはどのフォーク系シンガーよりも深いと思えるほど深い。個人的な印象だが、Karen Dalton が淡々とギターを爪弾きうたった感じで、感情を押し殺したような、投げやりにも感じられる彼女の唄は、心に深く響く。名盤中の名盤。2006/2018 作)

*FIONA BOYES:Voodoo In The Shadows A

(便宜上ここで。オーストラリア人 SSW でブルース・ギタリストの Fiona Boyes の新作。前作"Professin' The Blues""は Blues Blast Magazine の 2017 年の"Acoustic Album of the Year"賞を受賞。オーストラリア人二人～Tim Neal{ﾊﾓﾝﾄﾞB3,ﾋﾟｱﾉ、ﾍﾞｰｽ、ｻｯｸｽ}と Mark Gruden{ﾄﾞﾗﾑｽ}～にニューオーリンズ屈指のハーモニカ＆アコ奏者の Johnny Sansone がバックアップした本作は、バック・ミュージシャンによる味のあるブルース・サウンドを含めて、ブルース色濃厚で、ブルースの心髄的ギターをかき鳴らしうたう Fiona のヴォーカルも徹頭徹尾ブルースがかっていて圧巻。彼女完全にブルースの神様が乗り移っている。凄い。2018 作。Reference)

*MISSY RAINES:Royal Traveller A

(ベース奏者として"International Bluegrass Music Awards"という賞を７回も受賞しているという Missy Raines は SSW としても凄く魅力的で、主に女性のゲスト・シンガーとの爽やかなデュエットやハーモニーは、心軽やかな気分になる。バックの音楽はハイセンスなブルーグラスで、古っぽい土 臭さも感じさせつつ、爽やかで勢いがあって清々しい。プロデューサーの Alison Brown の手腕も見事で、SSW アルバムとして唄も音楽も鮮度が高い。w. Tim O' Brien,Claire Lynch,Amy Ray,Sierra Hull,Stuart Duncan,Dan Dugmore,Matt Flinner,Todd Phillips,Kenny Malone,Molly Tuttle,etc. 2018 作。Compass)

*MARTHA FIELDS:Dancing Shadows A

(南部魂というか、ヴォーカルにもフォーク、ブルース、カントリー、ブルーグラスごった煮のロックにも南部フィーリングがみなぎる Martha Field の新作。Martha と彼女のバンドが体現したロックは、オール・アメリカンな音楽がそこかしこに感じられて、ダウン・トゥ・アースで、何よりポジティヴ。彼女のヴォーカルの基礎的な部分で、アパラチア民謡や古いカントリーの匂いが感じられるのも、彼女のヴォーカルの大きな魅力になっている。2018 作。Martha Fields)

*SERA CAHOONE:The Flora String Sessions a

(女性 SSW の Sera Cahoone の 100%新鮮野菜な美味しいアルバム。初めて知った SSW だが、ギターやヴァイオリンやチェロの気持ちの良いアコースティック・サウンドの流れに乗って聞こえてくる Sera の耳元でささやくような唄の何と心地よいこと！Sera の唄はどの唄もリラックスしていて、自然体で、その響きは何か懐かしさを覚える響き。たった７曲のみの唄だが、むしろその少なさが逆に一曲一曲の味わいが深く感じられるような気がする。SSW は誰もがホロリの逸品。2018 作。Galaxy Dog Music)

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]





(Suzanne Jarvie)　　(Kate Fenner)

*SUZANNE JARVIE:In The Clear　　A
(2015 年作のデビュー作"Spiral Road"から四年。カナダの女性 SSW の Suzanne の待望の二枚目。実際に声質が Emmylou に似ていて、Emmylou Harris や Lucinda Williams などと比較されることの多い Suzanne だが、感受性豊かで詩情豊かな彼女の唄は、やはりカナディアン SSW らしい感性としか言いようのない夢想性が宿っていて、カナダの女性 SSW の大先輩の Joni Mitchell のように歌詞に女性的な繊細さが感じられるもの。加えて、プロデューサーの Hugh Christopher Brown のアコースティック･サウンドをベースにした音作りも、その繊細さと緻密さでカナダっぽい。Suzanne の身の回りに起きた母親の死や家族の不幸などの心的影響が深いところで表れてか、傷心を癒すようなメランコリックな詩情を深めている。味わいが海のように深い。2019 作。Wolf Island/CRS)

*KATE FENNER:Middle Voice　　A
(現在ニューヨークを拠点に活動するカナダ人女性 SSW の Kate Fenner のソロ･アルバムとしては三枚目。1980 年代からルーツロック系バンドで活動してきたヴェテラン SSW の Kate だが、本作は中年と呼ばれる年齢になった彼女が、結婚、父の死、認知症の母親の徘徊{「この離婚」という唄もある}などなど、楽しいことも辛いこともあった人生を振り返ったアルバム。彼女の唄は淡々としていて穏やかだが、しかしアコースティック～最小限にタイトなルーツロック仕立てのサウンドを伴って、言葉を噛みしめるようにうたう唄は、心に届く。Bob Dylan 作の"You're A Big Girl Now"や George Harrison 作の"That Is All"は、ことのほかしみじみと心に届く。ゲスト:Norah Jones,Bill Frisell。2018 作。Wolf Island/CRS)

*HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA:Angels In The Snow　A
(オランダのヴェテラン･アメリカン･ロック･バンドの Hidden Agenda Deluxe がカナダの女性 SSW の Oh Susanna をメムバーに招いて制作したクリスマス･アルバム。The Band の"Island"収録の"Xmas Must Be Tonight"で The Band 風いぶし銀ロックで幕開けする本作は、いぶし銀アメリカン･ロックから SSW 風そして Oh Susanna のヴォーカルをフィーチャーした女性 SSW 風と聴かせ所色々で、しかも一曲一曲の完成度が高く、味わいが深い。彼らの熟達したロックも聴き惚れるが、バンドのヴォーカルを担う BJ Baartmans と Eric Devries は SSW としても凄い魅力。それに Oh Susanna が花を添える。2018 年ルーツロック･アルバムのベスト。2018 作。Continental)

*COURTNEY HARTMAN & TAYLOR ASHTON
:Been On Your Side　　A
(ナッシュビルの女性ブルーグラス･グループの"Della Mae"の SSW

でギター奏者の Courtney Hartman とカナダ人 SSW でギター＆バンジョー奏者の二人組による本作は、悲哀感や寂寥感のようなものがそこはかとなく漂う滅多にお耳かかれない絶品の SSW アルバム。サウンドは渋く古びだ感じを醸し出してはいるものの、音楽センスは絶妙で、アメリカン･ルーツ系の男女のヴォーカル･デュオ･アルバムとして、独創性と完熟度が高い。二人のリラックスしつつ、阿吽のヴォーカル･ハーモニーが何とも言えず素晴らしく、心惹かれて仕方がない。二人のギターとバンジョーも細心の演奏が光っている。2018 年 SSW アルバムのベスト。2018 作。Free Dirt)

*SCHULD&STAMER:You Got The Bread...We Got The Jam　　A
(Hans Staymer Band の Hans Staymer{Stamer}と Andreas Schuld のどっぷりと南部志向＆ブルースな世界。名盤。1998 作。Blue Steak)

[CD/UK, IRELAND]









(Martyn Joseph)　(Slim Chance)　(Paul Stephenson)　(Reg Meuross)

*MARTYN JOSEPH:Here Comes The Young　　B
(Martyn Joseph を聴くのは何年ぶりだろう。ネットでアルバム･タイトル曲を聴き、粗めのサウンドと渾身のヴォーカルに感動。その感動はアルバムを通して聴いても、一切引くことはない。むしろ深まる。Martyn の唄は元々内省的な深みのある唄が持ち味だが、本作ではそうした本質を保ちつつ、唄がポジティヴで外へと向かっている。これほど心の奥底から沸き立つような、しかしそのひと言ひと言は思索的で、重みと深みを伴っている SSW アルバムはあまり記憶にない。Lisa Knapp や Tom Robinson のプロデューサーで、マルチ楽器演奏家の Gerry Diver の激情と癒やしのある音作りが見事で、Martyn の唄に宿る魂を輝かせている。SSW ファン、目が覚めるよ。2018 作。Beste! Unterhaltung)

*MARTYN JOSEPH:Full Colour Black And White　　a
(Martyn Joseph との付き合いは本作から始まった。闇の中から聞こえてくるような Martyn の純な唄達が心に響く。長期間の在庫品で中古～ほぼ新品のコンディション。1996 作。Grapevine)

*SLIM CHANCE:New Cross Road　　C
(Steve Bingham,Charlie Hart,Steve Simpson のオリジナル･メムバーに Billy Nichols,Graint Watkins,Brendan O'Neil の名うてのヴェテラン･ミュージシャンを加えた Slim Chance の新作は全く Ronnie Lane's Slim Chance な音楽。今もこの後ろ向きな線を前向きに体現しているのは嬉しいというか頼もしい。その前向きに思えるのは、音楽的には Balham Alligators のリーダーで、米国南部音楽のヴェテラン Graint Watkins{ヴォーカル、キーボード}の見えぬ力がルーツ志向を強め、バンド全体のパワーをアップしている。Slim Chance は Ronnie Lane's Slim Chance の独自色を失わずに、さらにいぶし銀の輝きを放っているのは素晴らしい。10 曲中４曲が Ronnie Lane のナムバー。中でも Pete Townshend&Ronnie Lane

の 1977 年作"Rough Mix"収録の"Annie"は感涙。2018 作。Fishpool)
*PAUL STEPHENSON:Mother Nature's Rules D
(ハイブリッド SACD。英国人の SSW の待望の Paul Stephenson の新作。Paul の唄は James Taylor が英国のカントリーサイドで悠々自適の生活を送り、良き隣人達と人生を楽しむかのような穏やかで心和む唄。そんな唄も魅力的だが、彼が奏でるアコースティック・ギターのマジカルな響きも凄く魅力的。アコースティックな高音質にこだわる Stockfisch らしい音響創りがより彼のギター・サウンドの魅力を引き出し、唄と音楽の鮮度を上げる効果をもたらしている。ケルティック・ギター名手の Ian Melrose のギターも隠し味的に効果を上げてもいる。Lea Morris のバッキング・ヴォーカルも心和む。2018 作。Stockfisch)
*REG MEUROSS:Reg Meuross D
(ハイブリッド SACD。もう何枚もソロ・アルバムを発表していて、ヒューマニティーある彼の唄はフォークフェスなどで人気の SSW という。以前のアルバムには Karen Tweed や Phil Beer や Jackie Oates なども参加したという。その Reg Meuross の新譜。初めて聴く Reg の唄は「何て心優しいの！」。メロディはソフトでヴォーカルは深呼吸をするように落ち着きが深い。ここでも Stockfisch のワンランク上を行くアコースティック・サウンドが見事で、夢見心地な Reg の唄を本当に夢見心地にしている。おそらく彼のアルバムでこれほど美しいアルバムはないのでは？！w.Ian Melrose{ｷﾞﾀｰ､ﾌﾙｰﾄ},Lea Morris{ｳﾞｫｰｶﾙ},Lutz Möller{ﾋﾟｱﾉ他},Justin Ciuche{ｳﾞｧｲｵﾘﾝ},Lucile Chaubard{ﾁｪﾛ},Jean Kelly{ﾊｰﾌﾟ},Antoine Pütz{ﾍﾞｰｽ},Hans-Jörg Maucksch{ﾌﾚｯﾄﾚｽﾍﾞｰｽ},Beo Brockhausen{ﾌﾟｻﾘﾀﾘｰ､ｵｰﾄﾊｰﾌﾟ､ｻｯｸｽ}。2018 作。Stockfisch)
*ALASTAIR MacDOUGALL WITH PAUL ANDERSON
:Trees May Bud B
(A.MacDougall は 1990 年代はじめから活動するというヴェテラン・フォーク・シンガー＆ギター奏者が名スコティッシュ・フィドル奏者の P.Anderson と組んだ新作。全 12 曲中４曲がトラッド曲に Archie Fisher や Tom Paxton や Darrell Scott 等のフォーク系の唄をうたったもので、それぞれの唄を愛しむようにうたう彼の唄はトラッド・シンガーというよりは、心優しい SSW 風で、気分ほっこりになる。折りたたみ式のブックレットを開けば、湖畔の石に腰を下ろして楽器を持って向き合うふたりの写真。実際にライヴ録音だが、唄もギターやフィドルの音色も今生まれたかのような新鮮な空気感があって、一つ一つの唄とサウンドが体に美味しい。"Songs"という副題を付けたくなるような唄があったかく感じられるアルバムだ。2018 作。Laural)
*MIKE SILVER:How Many Rivers A
(英国の叙情派 SSW と言えば Ralph McTell に Johnny Coppin そして Mike Silver。Mike の英国的叙情性豊か唄は最高潮。w.J.Coppin,R,McTell,Jo Partridge,Martyn Wyndham-Read,Phil Beer,Julie Silver,Roger Nichols,Mick Dolan,etc. 2008 作。Faymus)
*ALLAN TAYLOR:Behind The Mix A
(2000 年作"Colour To The Moon"の限定ボックス版{廃盤}のボーナス CD"Behind The Mix"の再発盤。前半の数曲が Allan Taylor のソロで、残りが Allan Taylor&Derroll Adams のデュオ曲という構成。"Colour To The Moon"収録直前に亡くなった Derroll Adams

{1925-2000}の追悼盤の印象。気心を知った二人の息の合った演唱に心和む。全 15 トラック。P22 のブックレットでは思い出の写真も拝める。2000 年/2017 作。Stockfisch)

*LISA KNAPP:Till April Is Dead - A Garland of May　　B

(「春眠暁を覚えず」というか、「春」の訪れを夢見心地のまま感性を優しく研ぎ澄ませて、柔らかな感性で伝統歌の数々を Lisa がシンギングした春いっぱいなトラッドだが、ブリティッシュ・フォークっぽいアルバム。川のせせらぎの音や鳥の鳴き声や鳩時計の時報を知らせる音や奏法の枠を超えたどちらかと言えばノイジーで愉快な各種楽器の音などが鳴り響く中、Lisa は春の夢の中で遊ぶ少女のように春向けの伝統歌を口ずさむ。奇跡の一枚。全 12 曲。2017 作。Ear To The Ground)

*LISA KNAPP:Wild And Undaunted　　B

(一枚目。2006 年。Ear To The Ground)

［CD/ＥＮＧＬＡＮＤ］



(Katie Doherty)



(Brothers Gillespie)



(Brothers Gillespie の三つ折りジャケットの内側の絵)

*KATIE DOHERTY & THE NAVIGATORS:And Then　　C

(デビュー・アルバム"Bridges"から 12 年の歳月を経て発売された北イングランドの SSW の Katie Doherty の新作。これは北イングランド発のフォーク・ミュージックとして奥が深い。彼女の唄はトラッドを自作音楽の創作源として、超トラッド的な音楽を創作していて見事。シンガーとしては Maddy Prior のタイプだが、腰を落ち着けてシンギングしているのと若さで、唄の味が濃く、今は Maddy より大きく魅力的。特筆すべきは、Katie のシンギングと一体となって伴奏を務める Shona Mooney のフィドルと Dave Gray のメローディオンの、まるで絵を描くようにダーク系の色彩感のある音楽の素晴らしさ。冬の北イングランドの海や海岸へと誘われるような気分になる。12 年待った甲斐のあるグレイトなブリティッシュ・フォーク・アルバムだ。2019 作。SteepleJack Music)

*THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell　　B

(ノーサンバーランドの James と Sam の Gillespie 兄弟の二枚目に当たる新作。初めて聴く二人のフォーク、兄弟のソロ・ヴォーカルとデュエットと渋いフィドルとギターが織りなすフォークは、1960 年代～1970 年代初めのブリティッシュ・フォーク或いはアパラチア辺りのフォークに影響を受けたフォーク？という印象を持つ渋く麗しくかつ愛おしいフォーク。兄弟の穏やかで英国的に愁い感のあるハーモニーはそこはかとなく美しい。この美しさは今の時代貴重。インタビューで、影響を受けたシンガーとして Dick Gaughan, Anne Briggs, Leonard Cohen, Kathryn Tickell などの名を挙げている。四曲目収録の"Tina's Song"は強くブリティッシュ・トラッドな曲として味わい深い。稀有な名品。ラップ包装なし{開封}。2018 作。The Brothers Gillespie)

*MARTIN & ELIZA CARTHY:Live At The Pavilion D
(Martin & Eliza 父娘による 2018 年２月のライヴで CD と DVD のセット。見た目、益々貫禄十分な Eliza と歳相応に老けた Martin。Martin のシンギングもギターもさすがに衰えが見られるが、それでもかくしゃくとしたシンギングは、正にいぶし銀の味わいがにじみ出ていて、味わい深いし、今まで味わえなかった味わいが味わえる。共演する Eliza も Martin のペースの合わせて、フィドルを奏で、豊かな声でシンギングし、ハモる。直に見て唄を聴く観客の拍手が温かい。会場はデカイがまるでホームコンサートのようなぬくもり感のあるライヴだ。全 12 曲。Eliza の貫禄は、CD の DVD 版{思い出話などおしゃべりや音合わせも入っています}でご確認下さい。2018 作。Under The Bed)
*BOB AND GILL BERRY:Echoes Of Alfredy B
(「暖炉のそばでうたって楽しむ」イメージで制作されたという Bob & Gill 夫妻の新作は、オックスフォードシャーのフォークソング収集家の Alfred Williams{1877-1930}が収集した民謡を中心に演唱したアルバムで、二人のシンギングといい、二人やゲストによるモリス･ダンス風音楽、それに土臭い英国トラッド･サウンドといい、イングランドのオーセンティックなトラッドの味わいと楽しさが自然体で溢れたもの。本作から夫妻のイングランド民謡を愛し、慈しむ心がやんわりと伝わってくる。終始「暖炉」の温かさ。英国トラッドの豊かさがわかる全 16 曲。2018 作。WildGoose)
*MISCHIEF AFOOT:Mischief Afoot B
(コッツウォルズを拠点に活動する Mischief Afoot は、Becky Dellow{ﾌｨﾄﾞﾙ},John Davis{ﾘｺｰﾀﾞｰ、ﾊﾞｳﾛﾝ},Jeff Gillett{ｳﾞｫｰｶﾙ、ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞｰﾗ、ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ、}のトリオ。選曲はイングランド、アイルランド、スコットランドのトラッドやその関係のミュージシャンの曲。彼らの手にかかれば、アイリッシュであろうとイングリッシュであろうと、彼ら流の魅惑の「トラッド」に生まれ変わる。その感覚というか意識は 70 年代ブリティッシュ･フォーク･バンドの多くがそうであったようにトラッドの祝祭気分やミステリアスさやワビサビに魅力を発見し、自分達流に演唱したもの。ジャケ写のように悪がしっこい妖精になって？楽しむトラッドが楽しい。全 14 曲。2018 作。WildGoose)
*BOB FOX & JOHN TAMS:A Garland For Joey B
(副題"The War Horse Songbook"。「ウォー・ホース～戦火の馬～」は、1982 年に出版されたマイケル・モーパーゴによる児童小説を舞台化した演劇で、スティーヴン･スピルバーグ監督により映画化もされているが、本作は演劇のために John Tams がトラッドのスタイルで作詞作曲した唄の中からハイライトの唄を Bob Fox がギターの弾き語りでうたったアルバム。驚くのは、Bob Fox の 60 歳半ばを過ぎてもなお、70～80 年代に Stu Luckley とのデュオで味わわせた英国トラッド調に毅然として、円やかにコブシの利いたシンギングと、ドキッとするほど、70 年代英国トラッドの空気に充ちたきららかなギターの音色を発していて、味わい深い。全 12 曲。2017 作。Fledg'ling)
*THE RHEINGANS SISTERS:Bright Field B
(Rowan{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｳﾞｨｵﾗ、ｳﾞｫｰｶﾙ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ} & Anna{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｳﾞｫｰｶﾙ、ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ他} Rheingans 姉妹の三枚目。スウェーデンのフィドル･ミュージックの影響を強く受けつつ、シンギングは極めてイング

ランド的な気品と美しさを持つ姉妹の音楽は、本作でも絶好調。fROOTS の 2018 年ベストアルバム第四位。2018 作。Rootbeat)

*LEVERET:Inventions B

(Andy Cutting{ｱｺ､ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ}に Full Englis の Rob Harbron{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ}そして Bellowhead,Eliza Carthy Band,Full English の Tom Sweeney{ヴァイオリン､ヴィオラ}から成る Leveret の本作はイングランド的な気品とロマンティックさが音楽の根っこに感じられる、爽やかな風を肌に感じるような気持ちの良い音楽。2017 作。Rootbeat)

*DAMIEN BARBER & MIKE WILSON:Under The Influence B

(販売した記憶のない CD が棚の隅っこから出てきて、聴いてみたら、おっそろしく見事なイングランドのトラッド･シンギング･アルバムで驚いてしまった。LP 盤風の装丁や、Peter Bellamy や Dick Gaughan や Martin Carthy や Harry Cox や Iwan MacColl 等の LP ジャケットや写真を使ったジャケットから Damien{ヴォーカル､ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ､ｷﾞﾀｰ}と Mike{ヴォーカル}の二人が目指す音楽が推し量られるが、二人のシンギングもギターもコンサーティーナも信じられないほど「70 年代トラッド」していてファンは恍惚必至。気分は正にお宝発掘。2009 作。Sources)

[DVD/ＥＮＧＬＡＮＤ] PAL

※PAL 専用 DVDﾌﾟﾚｰﾔｰ/ﾊﾟｿｺﾝで再生可能

*NIC JONES:The Enigma Of Nic Jones A

(1982 年二月の交通事故の振り返りから幕開けする Nic Jones のドキュメンタリー DVD。2010 年の"Sidmouth Folk Festival"での Nic Jones Trio{Nic Jones,Joe Jones,Belinda O'Hooley}のライヴ他 88 分。Topic)

*MADDY PRIOR THE CARNIVAL BAND
:An Evening Of Carols & Capers A

(Maddy Prior & The Carnival Band が 2003 年に行ったクリスマスツアーのライヴ。ライヴ 33 曲 97 分と Extra Feature21 分 30 秒。ケースの解説書留めには元々解説書なし。ラップ包装なし{開封}。2005 作。Park)

*FAIRPORT CANVENTION:35th Anniversary Concert D

(全 19 曲。153 分。検品をして送ります。2003 年。Secret Films 盤)

[CD/ＷＡＬＥＳ]

*BLODAU GWYLLTION:Llifo Fel Oed B

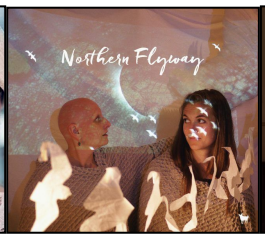
(再入荷。Blodau Gwyllton は小説家で女性 SSW の Manon Steffan Ros とギター奏者の Elwyn Williams の二人組。全曲ウエールズ語で、母親がうたっていたというトラッド曲一曲以外は全曲 Manon の自作曲。赤子を寝かせ付けるようにそっと優しくうたう Manon の唄も、Elwyn の繊細で穏やかなアコースティック･ギターの響きも、この世の物とは思えない穏やかで普遍性が感じられる響きがあって、ほんわかと心和んでしまう不思議に心地よい音楽。唄は川や海や湖や水をテーマにした唄が多く、本作の最後に収録された"Plant Bach"は、親から子へと受け継がれる永遠の命というようなものを花に置き換えて唄にした唄。Manon の唄は素朴だが感動は海より深い。Manon の父親の Steve Eaves は、Sutherland Brothers や Al Stewart とも共演経験のある SSW らしい。2018 作。Gwymon)

*AR LOG:Saith VII　B
(Ar Log の 22 年振りの新作で通算 11 枚目。2016 年には結成 40 周年記念ツアーで、21 カ国でコンサートをしたという。メムバー７名の内５名は白髪頭。結成 40 周年の祝宴の気分は本作にばっちり注入されていて、シンギングもウエールズ独特な男性コーラスも、二台のハープ、二台のフィドル、二台のギター、ピアノによる演奏も、彼らが創り上げたウエールズのトラッドのスタイル音楽が響き合っていて、また泣ける曲も含めて慶びの気分に充ちていて、幸せな気分。2018 作。Sain)
*CALAN:Deg - 10　A
(前作"Solomon"でウエールズを代表するトラッド･バンドに成長した三姫二太郎の五人組の Calan の新作。新録曲３曲とライヴ音源曲２曲{特にこの二曲は圧巻。}とシングル盤収録曲を新たにリミックスした２曲と既発売アルバムから 11 曲の計 18 曲収録。ソリッドに勢いのあるケルティックな音楽と男女のシンギングは、今日のケルティック･ミュージック･シーンの最前線に立つ魅力を放っていて、非の打ち所がない。トータルに充実さがみなぎっていて、華もあるし、馬力もある。2018 作。Sain)

[CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ]



(Claire Hastings)



(Northern Flyway)



(Iona Fyfe)

*CLAIRE HASTINGS:Those Who Roam　B
("Between River And Railway"から三年。Top Floor Taivers のメムバーで、容姿を含めて大きく成長したスコットランドの若き歌姫 Claire の待望の新作。本作は旅をテーマに伝統歌を丁寧にセレクトし、自作の唄を二曲に米国の SSW の Dave Alvin 作"Kings Of Calfornia"{すっかりスコティッシュ･トラッド調に変身}を加えた構成で、多くは辛かったり切ない旅の歌物語集。Laura Wilkie {ﾌｨﾄﾞﾙ}、Jenn Butterworth{ｷﾞﾀｰ}、Tom Gibbs{ﾋﾟｱﾉ}, Andrew Waite{ｱｺ}の四名によるハイブリッドなスコティッシュ･サウンドが素晴らしく、Claire のシンギングの質を高めている。そして演奏ラストを飾るは、Nic Jones や Danúなどの名唱でお馴染みのトラッドの名曲"Ten Thousand Miles"。この曲のみ無伴奏による美しく凛とした一人デュエットで、恋人と別れる切なさが身にしみる。「ところで Claire さん、お化粧ばっちりきめて、どこへご旅行？」「旅する昔話の世界にね」。ラップ包装なし{開封}CD。2019 作。Luckenbooth)
*TMSA YOUNG TRAD TOUR 2016　B
(BBC Radio Scotland の 2016 年の"Young Traditional Musician of the Year"賞に選ばれた若手ミュージシャン達～Mohsen Amini{優勝者でｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ}, Ryan Young{ﾌｨﾄﾞﾙ}, Hannah MacRae {ﾌｨﾄﾞﾙ}, Jessica Burton{ｸﾗﾙｻｯﾊ}, Murray Willis{ｱｺ}, Robbie Greig{ﾌｨﾄﾞﾙ}に 2015 年の優勝者で、Top Floor Taivers のメムバーでシンガーの Claire Hastings を加えた七人＋ギターの Jean

Damei による演奏。Claire Hastings をヴォーカルに据えてかつ、各ミュージシャンがスコティッシュ・トラッドの香り高い演奏を一途に演奏していて、そのフレッシュさが気持ち良い。2017 作。TMSA)

*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway B

(Northern Flyway はシェトランド生まれのシンガーでマルチ楽器演奏家の Inge Thomson とシンガーで SSW で鳥類生物学者の Jenny Sturgeon と SSW でマルチ楽器演奏家の三人の女性アーティストをフィーチャーした鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込んだ本作は、同じレーベルから発売された Karine Polwart{Inge Thomson は K.Polwart Band のメムバー}の自然環境保護への思いを込めた"A Pocket Of Wind Resistance"と通底する夢のように清々しいフォーク・アルバム。彼女等の音楽が素晴らしいのは、シンガー自身の心が鳥になっていて、シンギングは風に乗って飛翔し、それらのシンギングはフォークのスタイルであること。類い稀な美しいフォークとして傑出している。部屋の空気も清々しく一変する。2018 作。Hudson)

*IONA FYFE:Dark Turn Of Mind ¥1590

(Lizzie Higgins や Jeannie Robertson などのアバディーンシャーのリヴァイヴァル・シンガーに影響を受けたというアバディーンシャーの若き歌姫 Iona の新作は６曲収録ミニアルバム。Iona がうたえばどんな唄{バラッド}も初々しく輝く。今、彼女ほどに古謡{バラッド}を春の爽やかな風のような肌触り感でうたえるシンガーはいないのでは。Aidan Moodie{ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Graham Rorie{ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}, Rory Matheson{ﾋﾟｱﾉ}による細やかな伴奏も抜群。極めつけは、最後に収められた南アパラチア民謡で"Matty Groves"と比較されることの多い"Little Musgrave"。この一曲が本作の価値を一層高めている。2019 作。Cairnie)

*JULIE FOWLIS,ÉAMON DOORLEY,ZOE CONWAY AND JOHN McINTYRE :Allt C

(Julie Fowlis とÉamon Doorley{Danu}の夫妻と Zoë Conway の John McIntyre 夫妻のスコットランドとアイルランドを代表するシンガーとミュージシャンによる新作。本作はアイルランドとスコットランドの新旧ゲール語の詩歌を四人で演唱したアルバムだが、アイリッシュのエキスパートのÉamon,Zoë&John のアイリッシュの土俵の上で、Julie をスペシャル・ゲストとして迎えたような音楽で、Julie は毅然とスコティッシュ・スタイルのシンギングを披露する一方で、グループの一員としてとけ込んでもいる。不思議なことに Julie が参加したことで、Zoëの自然体の柔和なシンギングが思いの外映えて聞こえる。二人の夫二人の控えめなシンギングも良い味わいを添えていて、音楽の熟成度が高い。ふた夫婦による自然体の、そしてハイレベルな素晴らしい文化交流音楽だ。演奏の素晴らしさは言わずもがな。2018 作。Machair)

*TRAIL WEST:From The Sea To The City B

(四太郎から六太郎編成になったグラスゴーのフォーク・ロック・バンドの"Trail West"の新作で三枚目。荒武者のような Ian Smith のヴォーカルはそれだけで希少価値だが、今のご時世、スコットランドのミュージシャンの演奏力の底上げが凄く、アコ、ホイッスル、ハイランド・バグパイプやアコースティック・ギターなどによるスコティッシュ・トラッド風味満点な音楽は、潔い

ロック･サウンドと合体して､ワンランク上の独自の血湧き肉躍るおやじスコティッシュ･フォーク･ロックを体現している。2018 作。TW)

*KARINE POLWART:A Pocket of Wind Resistance B

(元 Malinky のヴォーカルで､スコットランドを代表する女性フォーク･シンガーの K.Polwart の 2017 年作。本作は毎年 9 月にアイスランドやグリーンランドの海食崖からスコットランドのフォース湾を通ってファラ･フロー･ロック湖に渡ってくる雁の群れへの思いを中心に自然環境保護への思いを唄にしたもの。美しく、夢のような音楽。2017 作。Hudson)

*SARAH HAYES:Woven C

(本作はシンガーでフルート､キーボード奏者で作曲家の Sarah Hayes が 2014 年の Celtic Connections の New Voices シリーズで発表した曲をアルバムとして発表したもの。15 曲中 2 曲が伝統歌のメロディの曲で､二曲以外は全曲伝統歌の歌詞。スコティッシュやケルティックな音楽センスの上に音楽のドラマを音で自由に表現したような音楽と Sarah の可憐で清々しいシンギング。バルーンに乗って旅する気分。2015 作。Sarah Hayes)

*COAST:The Turning Stone A

(Runrig クラスのフォークロック･バンド。Paul Eastham のヴォーカルも抜群。ゲスト:Duncan Chisholm。2011 作。Ruabhal)

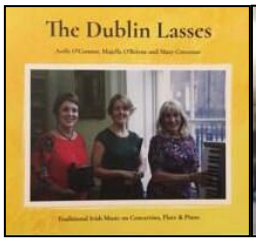
*CHRIS STOUT & FINLAY MacDONALD:The Cauld Wind A

(Chris&Finlay は伝統性に重きを置きつつ､産み落とされた音楽は革新的で典雅で高潔。音楽のすべてのレベルが高く､魅力的。フィドルとバグパイプの組み合わせによる新たな魅力的なスコティッシュ･ミュージックを創作。2013 作。Chris Stout Music)

*LAUREN MacCOLL:The Seer B

(スコットランド屈指のフィドル奏者の Lauren MacColl の本作は、17 世紀に生きたとされるスコットランドの予言者ブラハン・シーアの人生と予言に Lauren がインスパイヤーされて創ったもの。Lauren は子どもの頃に本で読んで抱いた不思議さをそのままスコティッシュ･トラッドのスタイルで､かつピリピリっとスピリット高く､精霊たちが棲む不思議な森に分け入るような不思議な音楽を創作していて､奥が深い。2017 作。Fais Rois)

[CD/ＩＲＥＬＡＮＤ] (NOW ARRIVAL)





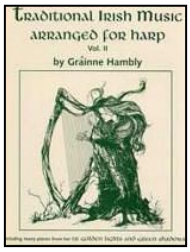
(Dublin Lasses) (Máire Ní Chéileachair)

*THE DUBLIN LASSES:The Dublin Lasses ¥2390

(2/17 入荷予定。副題"Traditional Irish Music on Concertina, Flute & Piano"。ダブリンを拠点に活動する Aoife O'Connor{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ},Majella O'Beirne{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ,Mary Corcoran{ﾋﾟｱﾉ}の女性トリオ。｢ダブリンで最もハイレベルの女性ミュージシャン達｣とのこと。楽しみ。2018 作。Dublin Lasses)

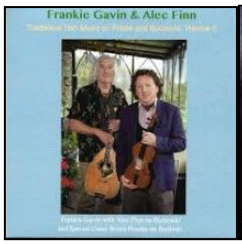
*MAIRE NI CHEILEACHAIR:Ceantar Glas Mhúscraí　　D
(2/17 入荷予定。2018 年 11 月に開かれたオリアダ杯で優勝したコークの女性シャンノース･シンガーの二枚組。一枚目はコークの Mhúscraíというゲール語使用地域に関連したシャンノース･ソングを含む選曲で、二枚目は英語によるもの。ほとんどは伝統歌とのこと。今最も輝いているシンガーということになります。2018 作。PORCD024)

[BOOK/ＩＲＥＬＡＮＤ] (NOW ARRIVAL)



*GRAINNE HAMBLY
:Traditional Irish Music Arranged For Harp Vol 2　　D
(2/17 入荷予定。アイリッシュハープ教室の生徒さんの希望で、ついでにタムボリン用にも仕入れ。CD"Golden Lights And Green Shadows"収録の曲数曲を含む伝統的アイリッシュのハープ曲 21 曲収録の楽譜。Grainne Hambly)

[CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系]
デジパック･タイプを含め、元々開封されているものが多数あります。







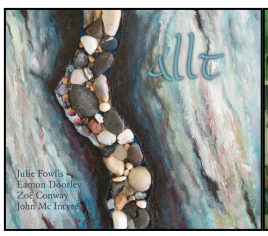
(Frankie&Alec)　　(By Heck)　　(Eimear Arkins)

*FRANKIE GAVIN & ALEC FINN:Traditional Irish Music On Fiddle And Bouzouki Volume II　　A
(Alec Finn が天国に行く二ヶ月前に収録されていた F.Gavin&A. Finn の約 40 年振りの二枚目。全 13 曲。デダナンというグループ名の使用権等で長い間不仲だった二人は、Alec が闘病中に仲直りし、一緒に演奏する仲に戻っていたという。本作はそうした二人の新作でラスト･アルバム。曲目は初期デダナンのレパートリー中心の馴染みのアイリッシュばかりということもあって、懐かしくもあり、また Frankie の真面目なフィドル演奏と、Frankie のよくうたう演奏に、Alec がブズーキで相手の演奏を引き立たたせつつ、響き合う伴奏を繰り広げるアイリッシュはとても爽やか。その爽やかさが何とも心地よい。逝く前にこんな美しいアイリッシュ演奏が出来て良かった良かった。ゲスト Brian Bourke{ﾊﾞｳﾛﾝ}。LP 形式スリムジャケット･CD-R 仕様。2018 作。Frankie Gavin)
*BY HECK:A Toast To The 1920's　　C
(1911 年にニューヨークに移住し、米国でにアイリッシュ･ミュージ

ック黄金期の先導役を果たしたMick,Joe&LouisのFlanagan兄弟の初録音が1921年。本作はBy Heck～Frankie Gavin{ﾌｨﾄﾞﾙ},Martin Murray{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Emma Corbett{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ},Carl Hession{ﾋﾟｱﾉ}～を名乗るアイリッシュの三人のツワモノ達＋Flanagan兄弟の故郷出身の女性メローディオン奏者の一姫三太郎がFlanagan兄弟に捧げたアルバム。Flanagan兄弟の音楽自体が大衆受けするノリ抜群のアイリッシュだが､彼らは兄弟達のレトロだが､ビンビン躍動するアイリッシュのスタイルをベースにしつつ､超絶な演奏で音楽をブラッシュアップする。メチャ凄い。特にFrankie Gavinのフィドルは今が旬と思ってしまうほど。おそらく天国のFlanagan兄弟はBy Heckの音楽に合わせ､｢奴ら最高！｣とセッションを楽しんでいるに違いない。2018作。By Heck)

*EIMEAR ARKINS:What's Next? B

(オールアイルランドのタイトル10個獲得という女性ゲーリック･シンガーでフィドル奏者で教師のEimear Arkinsのずば抜けて素晴らしいゲーリック･シンギング＆アイリッシュ･フィドル･アルバム。シンギングはアイルランドの伝統歌の研究家でシンガーの父親から習ったという。リルティングをはじめとして､シンギングの基礎が違うというかゲーリック･ソングのコアの味わいをしっかりと保持して､なおかつ孤高の美しさを放っている。それは70年代の英国のトラッド･シンガーがしっかりと保持していた荒野に咲く一輪の花のような孤高の美しさだ。また数曲での素朴なフィドルが心に響く。with Eileen Gannon{ｱｲﾘｯｼｭ･ﾊｰﾌﾟ},Kevin Buckley{ｷﾞﾀｰ}。包装なし{開封}。2018作。Eimear Arkins)



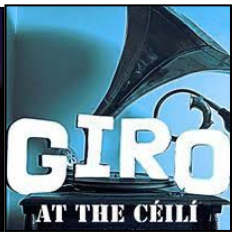
(Allt)



(Secret Sessions)



(Hannah Flowers)



(Giro)

*JULIE FOWLIS,ÉAMON DOORLEY,ZOE CONWAY AND JOHN McINTYRE :Allt C

(Julie FowlisとÉamon Doorley{Danu}の夫妻とZoë ConwayのJohn McIntyre夫妻のスコットランドとアイルランドを代表するシンガーとミュージシャンによる新作。本作はアイルランドとスコットランドの新旧ゲール語の詩歌を四人で演唱したアルバムだが､アイリッシュのエキスパートのÉamon,Zoë&Johnのアイリッシュの土俵の上で､Julieをスペシャル･ゲストとして迎えたような音楽で､Julieは毅然とスコティッシュ･スタイルのシンギングを披露する一方で､グループの一員としてとけ込んでもいる。不思議なことにJulieが参加したことで､Zoëの自然体の柔和なシンギングが思いの外映えて聞こえる。二人の夫二人の控えめなシンギングも良い味わいを添えていて､音楽の熟成度が高い。ふた夫婦による自然体の､そしてハイレベルな素晴らしい文化交流音楽だ。演奏の素晴らしさは言わずもがな。2018作。Machair)

*HENSHAW FAMLY & FRIENDS WITH SPECIAL GUEST :The Secret Sessions C

(Sharon Shannonがアイルランドのラグビー･チーム｢レンスター｣の人気選手ロビー･ヘンショウと彼の家族＆友人と行った特別な

セッション･アルバム。ヘンショウー家はアスローン{ダブリンとゴールウェイのほぼ中間にある町}の伝統音楽を長年にわたって演奏している家系で、ロビー･ヘンショウの祖父のビリーはバンド活動をしていたという。全曲で Sharon Shannon がセッションに参加し、開放的で和気あいあいとしたセッションの雰囲気を保ちつつ、大半の曲で先頭に立つ演奏で、旋風を巻き起こしている。アイリッシュの底力。本作の売上げはアスローンの South Westmeath Hospice に寄付されることになっている。2018 作。Ceol Music)

*HANNAH FLOWERS:Amhran Na Cruite C

(米国ミネソタ出身のゲーリック･シンガーでハープ奏者のデビュー作。全曲ハープの弾き語りによるゲーリック･ソング集。彼女のアイルランドの伝統歌へのアプローチは、音楽性もそうだが、カナダの Loreena McKennitt がケルト音楽に向かう姿勢に似ている。Hannah はゲーリック･ソングの持つ不思議さや優美な響きをガラス細工のような美しく輝きのあるシンギングで引き立たせ、輝かせる。｢シンギング･ウィズ･ハープ｣の弾き語りの素朴さが音楽の純粋さと質とを高めている。"award winning traditional singer and harpist"だそうだ。ゲスト:Dáithí Sproule{ｷﾞﾀｰ},Cory Froehlich{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ},Danielle Enblom{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾀﾞﾝｽ}。ケルティックな夢見心地保証。全 12 曲。2018 作。Hannah Flowers)

*GIRO:At The Ceili B

(アイルランドのゴールウェイで結成されたデンマーク人、ニュージーランド人、カナダ人そして紅一点日本人の一姫三太郎の四人組。本作は Giro のアコーディオン奏者の Anders Trabjerg のもう一つのユニットの Great Danes 路線の古き良きアイリッシュ。彼らが創作するのは 20 世紀はじめ頃のアイリッシュ･ケーリー･ミュージック。レコードの回転スピードを早回ししたかのようなノリ抜群のダンス曲のオンパレードはチャップリンの映画を観るようなレトロ感と面白さと人情味のあるハッピーな音楽。アイルランド人に大受け間違いない。ゲストで Toyota Ceili Band の Yuri Kitagawa さんがケーリードラムで参加。。2018 作。GIRO)

*GIRO:Galway International Retro Orchestra B

(彼らが目指す音楽は 20 世紀はじめ頃の雰囲気の音楽。アイリッシュもジプシーもクレズマーも北欧も｢20 世紀はじめ頃の雰囲気｣をそれ風のレトロなサウンドで創作していて、ユニークだし、全体を通して、コミカルだったり、ホロリとさせられたり、音楽に人情味が感じられて、心はずっと笑顔。2014 作。GIRO)

*THE GREAT DANES:In Ireland B

(GIRO の Anders Trabjerg{アコ}と Jonas Fromseier{バンジョー}の二人のデンマーク人アイリッシュ演奏家による本作は、古いスタイルのアイリッシュ･ミュージック。これはまるで魔法の音楽。古いアイリッシュの特徴を外人目線の｢面白い｣感覚でとらえ、その部分を楽しんで演奏する･･･。その結果のまるで古いアイリッシュのつぼを得た演奏に、心は笑顔笑顔。忘れた頃に聞こえてくるボーンズのおどけた音も楽しい。ゲスト:Johnny"Ringo"McDonagh。2008 作。Great Danes)

*KARAN CASEY:Hieroglyphs That Tell The Tale B

(Bob Dylan 作"Hollis Brown"を米国オールドタイム＋ケルト音楽合体サウンドを配し、凛としたシンギングで圧倒して幕開けする

待望の Karan Casey の新作は、ケルト風味南部志向米国女性 SSW 的な方向性と味わいを強めた心機一転の意欲作。アイリッシュを背負いつつ、フォーク・シンガー目線で米国フォーク＆SSW{Eliza Gilkyson, Janis Ian, Patti Griffin 等}の唄の世界に挑み、かつ遊び楽しむ感じで、新たな気分で「良き唄」を謳歌する清々しささえ感じられるもの。w. Donald Shaw{ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰでもある}, Maura O'Connell, Pauline Scanlon, Karen Matheson, Aoife O'Donovan, Michael McGoldrick, Dirk Powell, Catriona McKay, Niamh Dunn, Sean Og Graham, Niall Vallely, etc. 2018 作。Vertical)

*CUIG:The Theory Of Chaos C

(2013 年結成の五太郎の若きアイリッシュ・バンド"Cúig"の新作で二枚目。メムバーは Miceal Mullen{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}, Rónán Stewart{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Ruairí Stewart{ｷﾞﾀｰ}, Eoin Murphy{ｱｺ}、Cathal Murphy{ﾄﾞﾗﾑｽ、ｳﾞｫｰｶﾙ他}。Irish American News で"Best New Irish Band 2016"に選ばれたという彼らの音楽は、様々なタイプのアイリッシュのノリが重なり合ったチャレンジ精神旺盛なアイリッシュ・フォーク＆トラッド。同じタイプのバンドはちょっと思いつかない。かと言って異色な感じがしないのは、音楽そのものも、そして音楽する心もアイリッシュしているからだろう。音楽が若者らしく清々しい。2018 作。Cúig)

*DAITHI GORMLEY:Fiddling Without A Bow C

(副題"Irish Traditional Music on Button Accordion"。Joe Burke が"Master musician"と呼ぶスライゴーのボタン・アコーディオン奏者の Daithí Gormley のデビュー作。ちょっとややっこしいが、彼の父方の祖母のいとこが James Morrison で、母方の祖父が著名なメローディオン奏者だという。Catherine McHugh のピアノとの共演による Daithíの本作は、スライゴーのお年寄りも歓喜するスライゴーのトラッド色濃厚なアイリッシュ。元々アップテムポな奏法をさらにシェイプアップした Daithíのアコは、目が回るほどだから、この音楽でダンスしたら、お年寄り･･･ステップは大丈夫かしらん。Daithíにアコを教えたことのある P.J. Heron は"Brilliant playing"と賛辞し「いつかフィドルとの共演盤が聴きたいね」と。2018 作。Daithí Gormley)

*PETER BROWNE:Sidewinder ¥2390

(1953 年ダブリン生まれで 6 歳から演奏をしているという超ヴェテラン・アイリッシュ・ボタン・アコーディオン奏者 Peter Browne のソロ。空前絶後。2018 作。Peter Browne)

*TOMMY PEOPLES
:Traditional Irish Music On The Fiddle ¥2390

(1985 年に GTD からカセットで発売され、1993 年に CD 化されて廃盤のなっていた T. Peoples の直球アイリッシュ・フィドル・アルバムが新たな意匠で再発。Eugene Kelly がピアノとギターで共演。全 12 トラックの全 20 曲。1985 年/2018 再発。Trad Ireland)

*PHILIP DODDY:Yellow Moon On The Rise ¥2390

(スライゴーのトラッド・シンガーの Philip Doddy の三枚目。Philip は一度聴くと心に焼き付く独特な味わいのあるシンガーで、"As I Roved Out"や"The Mountains Of Pomeroy"や"On Raglan Road"等などトラッドの名曲を侘び寂びの節回しで、自身唄に酔い、じっくり味わうようにシンギングする。Caroline Locke のピアノの伴奏と Brian McDonagh のマンドーラの伴奏で、聴き親しんだアイルラ

ンド民謡がまた違った味わいで味わわしてくれる。スルメ味のアイルランド民謡。2017 作。Philip Doddy)

*PAT McNAMARA:The Two Sides Of Pat Mac ¥2390

(Tulla Céili Band のアコーディオン奏者だったというクレアのアコ奏者 Pat McNamara のソロ。おそらく 1970 年代か 80 年代の演奏だろう。前半７トラック{10 曲}がアイリッシュで後半６トラックが"Continental"。こんな早い演奏でダンスできるの?!とつい思ってしまう Pat の早弾きは、もの凄い。アコがギンギン即興しているのに対して、ベースギターがメトロノームのようにきっちりリズムを刻んでいるのが、何とも愉快。おそらくカセット･アルバムの 2018 年再発。Trad Ireland)

*THE HIGH SEAS:The High Seas ¥2390

(Antóin Mac Gabhann の娘の Caitlín Nic Gabhann{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ、ﾀﾞﾝｽ}と Altan の Mairead の甥の Ciarán Ó Maonaigh{ﾌｨﾄﾞﾙ}の Caitlín& Ciarán 夫妻にシャンノース･シンガーでフィドル＆ブズーキ奏者の Cathal Ó Curráin を加えたトリオによる秀逸作。Caitlín& Ciarán のお二人を要にした音楽の絶品なこと！それもひけらかす演奏ではなく、各メムバーの演奏は細やかで、呼吸をするようにテムポがよく、演奏者同士が最も気持ち良く響き合える音楽を創り上げている。伝統音楽にまみれて育って、その中から美しく咲いた蓮の花のように真に芯から美しいアイリッシュ･ミュージック。2018 年アイリッシュのベスト。2018 作。The High Seas)

*ANTON MacGABHANN & CAITLIN Nic GABHANN

:Tobar Bhride ¥2390

(Antóin MacGabhann{ﾌｨﾄﾞﾙ}と Caitlín NicGabhann{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ、ﾀﾞﾝｽ}の父と娘によるアルバム。父親を通してアイリッシュに親しんでその道を進んで、父親とはまた違うアイリッシュの美しい花を咲かせている娘、その親子が親しんできた思い出の音楽を仲睦まじく演奏したアルバム。思い出の音楽には、Caitlín と Ciarán の結婚式で父 Antóin が Caitlín のために作った曲や 1970 年代初めに Antóin が働いていたところで聴いて好きになったというコークのバンドの演奏曲や Junior Crehan から習ったという曲等々。w. Brian McGrath{ﾋﾟｱﾉ}。2018 作。Caitlín NicGabhann)

*SEAN GARVEY:The Bonny Bunch Of Roses C

(タムボリンの 20 年前のベストセラー。アイルランドでは"Singer's singer"と呼ばれているケリー出身のゲール語も英語もレパートリーのトラッド･シンガーでギタリストの Sean Garvey の二枚目。彼の深く落ち着きのあるシンギングは、深く感動的。アイルランドの男性トラッド･シンガーで右に出るものはいない。本作後アルバム･リリースはないようだが、現在も現役。w.Mick Kinsella, Josephine Marsh,Liam Lewis,Eoghan Og Garvey。Produced by P.J.Curtis。在庫数僅か。2003 作。Harry Stottle)

*BERNADETTE MORRIS:Where The Heart Is a

(Paul Brady が大絶賛した 2013 年のデビュー CD"All The Ways That You Wander"から５年。その間、結婚そして一児の母親になったという女性アイリッシュ･シンガーの Bernadette の５曲収録ミニアルバム。デビュー CD がトラッド志向だったのに対し、本作は日常生活で感じた想いなどを Bernadette 自身が自作･共作で作ったオリジナルなアイリッシュ･フォーク。トラッドをうたうのと変わりなく、アイリッシュの香りが高い。2018 作。Bernadette Morris)

*MARIE AGUS SEAMUS O BEAGLAOICH
　:An Ciarraioch Mallaithe　　B
（名盤復刻。Máire & Séamus Begley の兄妹{姉弟?}による 1973 年のアルバム。Máire{ヴォーカル､ギター} & Séamus{ヴォーカル､ｱｺ}のゲーリック･シンギングをフィーチャーしたアルバムで､それぞれのソロ･シンギングとデュエットは､Skara Brae 兄妹くらい初々しく円やか。1973 年/2017 作。Gael Linn）
*TONY O'CONNELL:Live And Well　　A
（2015 年にフルート奏者のÉamonn O'Riordan と名作"Rooska Hill"を発表した西リムリック出身でコンサーティーナのオール･アイルランド･チャンピオンの Tony O'Connell の初ソロ･アルバム。w.Arty McGlynn{ギター},Brid Harper{フィドル},Cyril O'Donoghue{ブズーキ},Trevor Hutchinson{ダブル･ベース}。全 13 トラック/29 曲。アイルランドの宝。2017 作。Tony O'Connell）
*JOANNA HYDE & TADHG Ó MEACHAIR:One For The Foxes　　A
（ゲスト･シンガーの Roisin Ni Ghallogaigh とのデュエットによるイエーツの"Prelude"で幕開けし､同じく二人のデュエットによるイエーツの"Tread Softly"で幕を閉じる Joanna Hyde{ヴォーカル､フィドル}と Tadhg Ó Meachair{ｱｺ､ヴォーカル}の男女の二人組による本作は､女性フォーク･シンガーとアイリッシュがミックスした清々しいアイリッシュ。唄と唄を包むアイリッシュ･サウンドが涼風感があって､最高にさりげなくて気持ち良い。2017 作。Joanna Hyde & Tadhg Ó Meachair）

［CD/ＵＳＡ{ﾄﾗｯﾄﾞ､ｱﾊﾟﾗﾁｱﾝ他}］



（The Other Years）
*THE OTHER YEARS:The Other Years　　A
（fROOTS 誌の一押しの CD レビューで知って聴いたら､当たり！The Other Years は Anna Krippenstapel と Heather Summers の誕生日が三日違いの女性二人組。Anna は SSW の Joan Shelley のフィドル奏者。二人ともにシンガーで､伴奏楽器はフィドルとバンジョーとギター。彼女達の音楽は Jean Ritchie や Hazel Dickens を思い出させるアパラチア民謡やオールドタイム･ミュージック。｢当たり！｣の音楽だが､フィドルやバンジョーの音色は渋々な上に二人のシンギングはゆるい。Michael Hurley の"Wildegeeses"をうたているが､Michael Hurley の音楽に通じるのんきさやもの哀しさやユーモアの感覚が感じられて､泣けるほどに愛おしいお宝音楽。2018 作。No Quarter）
*JEFF WARNER:Roam The Country Through　　B
（フォークソング収集家でフォーク･シンガーの Anne & Frank Warner 夫妻の息子 Jeff Warner のソロ。曲目は両親から学んだ唄もあれば､両親が出逢ったシンガーから教わった唄もあれば､また古いレコーディングから覚えた唄など様々だが､Jeff のスタイ

ルは聴き覚えた米国の古謡に忠実なスタイルで、ギターやバンジョーやコンサーティーナを奏でながらうたう唄は、そのまま米国古謡の素朴な味わいに充ちていて、うっすら英国古謡の世界へとつながる味わいの唄もある。それもその筈？Pete Coe の音楽パートナーで英国のトラッド･シンガーの Alice Jones が大半の曲でヴォーカル･ハーモニーとホイッスルなどの演奏で共演している。全 17 曲。WildGoose）

［CD/ＣＡＮＡＤＡ｛トラッド他｝］



（Les Poules à Colin）

*LES POULES à COLIN:Morose C

（Sarah Marchand-Lebossé｛ヴォーカル、ピアノ｝, Béatrix Méthé｛ヴォーカル、フィドル｝,Éléonore Pitre｛ヴォーカル、エレキ&アコースティック･ギター｝,Marie Savoie-Levac｛ヴォーカル、ベース｝の若き四姫と Colin Savoie-Levac｛ギター、マンドリン、ブズーキ、ヴォーカル他｝の一太郎の五人組ケベック･トラッド･バンド "Les Poules à Colin"のデビュー作。ケベックのバンドで女性シンガーというのも、また五人中四人が女性というのも珍しいが、ケベックのトラッドをベースに女性的な？自由な発想で伸び伸びとした音楽を創り上げているのは、実に爽快。足パーカッションが加わった曲ほかリズム感が豊かで、フィドル、ピアノ、各種ギター系楽器等が織りなすサウンドは響き合って、よくうたう。その一方で渋いトラッド･シンギングも忘れてはいない。2017 作。SteepleJack Music）

*LE VENT DU NORD:Tetu B

（ケベックのトラッド･バンドの四人組"Le Vent Du Nord"の 2015 年作。Le Vent はケベック･トラッドのルーツの音楽を固持し、ケベック･トラッド特有のダンス音楽のリズムを最大限に生かし、活気ある今日のケベック･トラッドを果敢に創作する。2015 作。Borealis）

［CD/ＳＷＥＤＥＮ］



（Fränder）



（Järventaus&Dluzewski）

*FRÄNDER:Fränder B

（若き歌姫 Natasja Dluzewska｛ヴォーカル、フィドル｝に Gabbi Dluzewski｛フズーキ、マンドリン｝,Daniel Dluzewski｛ダブルベース｝のスウェーデン人三名と Säde Tatar｛フルート、ヴォーカル｝のエストニア人一名の二姫二太郎のスウェーデン＆エストニア混成の北欧トラッド･バンドの

爽快なデビュー作。曲は主にスウェーデンの伝統的詩歌とエストニアの伝統的詩歌にバンドがトラッドのスタイルで曲を付けて、演唱したもので、Matasja の、正にスウェーデン･スタイルの軽やかなシンギングを含め、若々しいセンスに溢れていて音楽が爽快。その上に Säde がうたうエストニアの伝統的詩歌はエキゾティックなムードを醸し出していて、音楽に深みを添えている。バンド名の Fränder は古いスウェーデンの言葉で、家族や血縁を意味するとのこと。2017 年/2018 作。Nordic Notes)

*JARVENTAUS･DLUZEWSKI:Jorden Svart B

(スウェーデン最北端のノールボッテン県出身のトラッド･シンガーの Maria Järventaus Johannson と Fränder のブズーキ＆マンドリン奏者の Gabbi Dluzewski の二人組。二人は Maria が 18 歳のときに伝統音楽を学ぶ場で出会い、その後一緒に学んだストックホルムの大学を Maria が卒業し、故郷に帰る前に記念に制作したのが本作。Maria は Maria 自作の数曲と文字通り極北のトラッドの数々を Gabbi の細心の伴奏と一体化して、凛とシンギングする。Maria の一心なシンギングの素晴らしさもさることながら、Maria のシンギングに寄り添う一心な伴奏も感動的。ラストを飾る伝統歌 "Den Svartaste Karpen"は、文字通りラストの悲哀感が Maria のシンギングにも Gabbi のマンドリンにも表出していて、ジワリジワリと感涙する。2018 作。Nordic Notes)

[CD/ＦＩＮＬＡＮＤ]

*PAIVI HIRVONEN:Alku - The Beginning B

(Okra Playground のシンガーでリラ奏者の Päivi Hirvonen のソロ。フィンランドのトラッドの土俗的な味わいを強く持った野性味あるシンギングと、同じく自身が奏でる野性味あるリラの演奏は、Okra Playground でぶっ飛んだのと同じくらいぶっ飛んでしまった。彼女がフィンランドのトラッドに傾ける情熱はもの凄い。フィンランドの民謡に宿る魂を感じ取り、全身全霊を傾けてシンギングし、リラをノイジーに、ときに稲妻のように、ときに妖精が踊るように奏でる。これまでに出逢ったフィンランドの女性シンガーでピカー。彼女歌の先生でもある。凄いシンガーが育ちそう。2018 作。Nordic Notes)

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]



(Røine/Warg)

*RØINE/WARG:Bibopalula B

(おおっと。Daniel Sandén-Warg{ヴォーカル、ﾗﾝｹﾞﾚｲｸ、口琴他}と Sudan Dudan の Anders Erik Røine{ﾆｯｹﾙﾊﾙﾊﾟの前身のﾓﾗﾊﾙﾊﾟ、各種ﾌｨﾄﾞﾙ、口琴、ヴォーカル他}の二人組による本作は、今から 30 年前、Hedningarna を初めて聴いたときに似たトキメキ。民俗楽器をかき鳴らし、Daniel のヴォーカルもサウンドも異世界からの声や音

楽ののような土俗的で不思議な音楽を創作する。Garmarna やその後の Hedningarna の完成された北欧トラッドのコアの音楽とも言える原初的トラッドは、魂を揺さぶる。Ta:lik という、どちらかと言えば、ピュアな北欧トラッドをリリースするレーベルからのリリースというのも面白い。2018 作。Ta:lik)

*MATTISGARD & RØINE:Sudan Dudan B

(Marit Mattisgard{今の姓は Karlberg}と Anders Erik Røine の Sudan Dudan のデビュー作。当時もしびれたが、今も同じ。もう既に独自の北欧風フォーク＆ブルースの味わいを煎じ出していて、素晴らしい。タイプライターで打って作ったブックレットの文字が読みづらいのだけが問題。2006 作。Ta:lik)

[CD/ＬＡＴＶＩＡ]



(Tautumeitas)

*TAUTUMEITAS:Tautumeitas B

(美貌で目を引く美人揃いの六人組女性ヴォーカル･グループの Tautumeitas のグループとしてのファースト･アルバム。彼女達の音楽がラトヴィア民俗音楽の本物志向であることは、彼女等の大地を揺らすシンギングとポリフォニックなコーラスを聴けば、即実感。その音楽性は、音楽性の先進性を含めて、フィンランドのヴァルティと似ている。しかしやはり六つの美声による唄の数々は、ラトヴィア民謡の聖から俗まで表現し切っていて、唄の味わいの幅が広い上に、時に大胆に打楽器をフィーチャーした曲など、ロックのパワーもあって音楽的にもスケールがデカイ。北欧や英国のフェスに出たら即人気者になるだろう。彼女等はバグパイプと太鼓のグループの Aiji との共演アルバムを 2017 年に発表している。2018 作。CPL-Music)

*AUJI:Aulos... B

(ご存じバグパイプと太鼓のグループの Aiji の 2007 作。他にギガという大型フィドルやダブルリードの笛にヴォーカルも加わった音楽は各楽器の伝統色豊かなアンサンブルが見事で、勇壮な音楽を華麗にダイナミックに創作している。2007 作。Lauska)

*SYMBOLIC:Muzam Saule Debesis B

(五太郎から成るラトヴィアのフォーク･ロック･バンド"Symbolic"のデビュー･アルバム。デビュー･アルバムだが、結成は 2000 年の大ヴェテラン。民族楽器とロック楽器の混成だが、ドラムス、ベース、エレキギターが全面に出ていて、リード･ヴォーカルの Uldis Kakulis のラトヴィア魂を鼓舞する堂々たるシンギングと相まっヴォルテージの高いフォーク･ロックを体現している。2017 作。Lauska)

[CD/BELGIUM,FLANDERS]

*THE HELEN FLAHERTY BAND:Gazing At The Moon B

(元 Shantalla のヴォーカルで屈指のスコットランド人トラッド･シンガーの Helen Flaherty のケルティック･バンドのデビュー作。メムバーは Ies Muller{ﾌﾙｰﾄ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Philip Masure{ｷﾞﾀｰ､ｼﾀｰﾝ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Siard de Jong{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾌﾞｽﾞｰｷ､ｳﾞｫｰｶﾙ}。Shantalla と同じく音楽性はアイリッシュを中心にしたケルティックだが､Helen の名を冠しただけあって､本作は Helen のシンギングと Philip Masure のギター＆シターンの妙技を要に､フィドルとフルートがケルティックな芳香を添えるという音楽創りが成されていて､Helen のたおやかなシンギングは､かつてなく優艶で実に味わい深い。タイトルではないが､｢お月見｣で夢うつつ気分。2018 作。Appel)

[CD/ＧＡＬＩＣＩＡ]



(Cantigas E Agarimos)

*CANTIGAS E AGARIMOS:O Corazon Aberto B

(タムバリンの一種のパンデレータにパーカッション､ガイタ､アコーディオンなどの音楽と男女の合唱によるガリシアの民俗音楽だが､前回販売したガリシア南部の女性ヴォーカル･トリオ"Tanxedoras"の音楽をさらに幅を広げた音楽で､ガリシアの民衆音楽の素晴らしさが詰まっている。グループにはダンサーもいるようで､音楽にはダンスの空気感がみなぎっている。他の地域のケルト音楽グループの影響を受けた Milladoiro のようなガリシアン･バンドとは味わいを異にした土俗色濃厚な素晴らしい音楽。ガリシア音楽の底力みなぎる快作。2018 作。Inquedanzas Son)

[CD/ＩＴＡＬＹ]



(Cantigas E Agarimos)

*BALARÙ:Gravure B

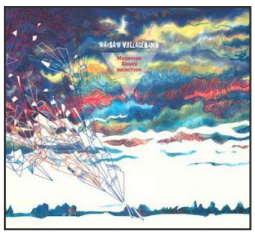
(Balarù{ダンスを愛する人々の意}は Francesco Cavallero{ﾊｰﾃﾞｨｶﾞｰﾃﾞｨ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Andrea Lopomo{ﾌﾞｽﾞｰｷ､ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Ilario Olivetti{ｺﾙﾇﾐｭｰｽﾞ､ｸﾗﾘﾈｯﾄ､ﾌﾙｰﾄ他},Andrea Beltrando{ｱｺ}の北イタリアはピエモンテの四人組トラッド･バンド。かつてピエモンテからは数々の素晴らしいトラッド･バンドが産声を上げたが､いつしか姿を消していった。本作は､時は過ぎて､ピエモンテの伝統音楽の魅力に取り憑かれた若者四人が独自にリサーチして創作したピエモンテのトラッドで､20 世紀後半にピエモンテのトラッドを復活させた先輩達の音楽も参考にしたであ

ろう彼らのトラッドは、各種楽器の演奏力と表現力が充実した上に、活き活きしていてすこぶる瑞々しい。彼らのピエモンテの伝統音楽に注ぐ愛情が音楽にばっちり表れていて、心底感動的。2018 作。Felmay)

*ROSAPAEDA:In Forma Di Rosa B

(南イタリアの歌姫 Rosapaeda の 2001 年のアルバム。彼女のアラブ＝地中海風味香るヴォーカルと敏腕演奏家達による汎南イタリア～汎地中海音楽的にスケールの大きな民俗色豊かな音楽。2001 作。Sottosuono)

[CD/ＰＯＬＡＮＤ]



(Warsaw Village Band)

*WARSAW VILLAGE BAND:Masovian Roots Re:action C

(現在東西ヨーロッパのトラッド･バンドで最も勢いのあるトラッド･バンドの Warsaw Village Band の八枚目。トラッドに挑む志の高さと豊かで幅の広い民俗音楽性は、かつてのハンガリーの Kolinda やフィンランドの Värttinäクラス。本作はポーランド中東部のマゾフシェ県のフォーク･ミュージックにスポットを当てたアルバムで、彼ら独特な異種交配的で野趣なスタイルを保持しつつ、かつてなく土地の伝統音楽に根ざした「フォーク･ミュージック」の香りを放つ音楽になっている。彼らの手にかかれば、どんな民謡も音楽も誇り高い東欧トラッド～ワールドミュージックに生まれ変わる。滅茶苦茶凄い。2018 作。Jaro)

*WARSAW VILLAGE BAND:Sun Celebration D

(Warsaw Village Band の七枚目に当たる本作は二枚組。三人の歌姫をフロントに立てた彼らのヨーロッパと東アジアの範囲で国境を越えた独自のワールド･ミュージックは、本作でさらに勢いを増していて、感動的。土俗的な歌姫達の唄は汎大陸的な大地の響きだし、民族楽器を駆使した音楽は様々な民俗性がミックスされいて呪術的で妖艶。ゲスト:Mercedes Peón,Ustad Liaquat Ali Khan,Sanjay Khan,Amrat Hussain。2017 作。Jaro)

[CD/ＭＡＬＩ]



(Bassekou Kouyate)

*BASSEKOU KOUYATE & NGONI BA:Miri C

(マリのンゴーニ奏者の Bassekou Kouyate と自身のバンド"Ngoni Ba"の待望の新譜。ボトルネック奏法を取り入れた Bassekou のン

ゴーニの演奏は、西アフリカのコラの一流奏者の演奏に引けをとらず魅力的だが、本作は多数のゲスト・シンガーや演奏家を招いたホーム・セッションのような音楽。多数の招待客を迎えていながら、終始彼らの音楽が薄められることなく、むしろ深く民俗音楽色が表出しているのは、驚かされる。彼ら独特な卓越したンゴーニの演奏と Bassekou の奥さんの Amy Sacko のシンギングの力によること大かと思われる。マリの小さな村で村の凄腕の演奏家＆シンガー達のセッションに出くわした気分。招待客の中には Bela Fleck や Carolina Chocolate Drops の Dom Flemons やモロッコの Majid Bekkas やキューバの Madera Limpia も。素晴らしい音楽は人を呼ぶ。2019 作。Outhere)

---

*前回、初めて年の瀬も押しせまってカタログを発行しましたが、想像以上に到着の遅れに悩まされました。ある小包を追跡したら、二週間以上経っても出荷先の国内止まり。「目的先へ出発」の表示が出たときには「やっと・・・」とひとまず安堵しました。日本に向かって出発してから、手元に届けられるまでも、毎日どこまできたか追跡しながら待ちました。届いたときは、待ち焦がれていた恋人と逢った気分でした。そんなこんなで、年末年始にまたまた多くの方にご迷惑をお掛けてしまいました。
*さて今回全部聴き終わって、やはり北米・英愛・北欧・東欧と女性シンガー達の色とりどりな音楽の素晴らしさを感じましたが、その一方で、少数とは言え、南部一途な Malford Milligan や唄のインパクトが強い Martyn Joseph や英国風愁いのある Brothers Gillespie などは、それぞれが個性的でピカーでした。Martyn Joseph を聴いたときは、表紙のジャケ写はこれ！と思っていましたが、結果はジャケ写として映える歌姫(Claire Hastings)に手が伸びてしまいました。
*呆れられるかもしれませんが、また堀田はりいの名で本を出版します。表紙の絵やタイトルから小説と勘違いされることもあるかもしれませんが、学術書です。考古学者や古代史研究家の皆さんが気づいてなくて、日本の歴史や文化について重要なことを多く書いています。表紙の絵は神武の東征で、神武の軍船が太陽を背にして熊野に向かう場面です。義兄に描いてもらいました。
*本年もどうぞ宜しくお願いします。では、今年最初の注文をお待ちしています。(船津)

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆



堀田はりい著『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』
～祭祀(マツリ)から読み解く古代日本の正しい歴史～
～纏向も卑弥呼も邪馬台国も全面解決～

3月中旬発売予定の堀田はりい著『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』（右文書院）の**ご予約をお受けします**。四六判２４０ページ。定価１８００円＋消費税
発売され次第、送料無料にてお送りします。お支払いはお受け取り後でＯＫです。
以下目次です。おそらく最も面白い《終章》と《巻末》の個々の見出しを表示します。

《序章》
《第１章　建物群の時代》
《第２章　祭祀土坑の時代》
《第３章　古事記・日本書紀再考》
《第４章　銅鐸考》
《第５章　前方後円墳の時代へ》
《終章》
神武の勢力と神仙思想と太陽神信仰
神社のシャーマニズムとアニミズム
卑弥呼の墓と女王国
女王国から邪馬台国そして天皇国家誕生
卑弥呼と宇佐神宮と神武の東征
《巻末》
高句麗の建国神話と日本の建国神話
《特別寄稿》
卑弥呼元女王からのメッセージ



口絵（神社を併設した崇神天皇の宮殿）©梅田紀代志